近世の城と城下町

―膳所・彦根・江戸・金沢―

財団法人滋賀県文化財保護協会 編

目次

口絵
発刊にあたって
凡例

第一部　シンポジウム　城と城下町―彦根藩と膳所藩を中心に―

一　天下統一と彦根・膳所築城　藤井譲治　16
二　彦根城と城下町の調査　谷口徹　48
三　膳所城下町を掘る　中村智孝　72

四　パネルディスカッション　93
パネリスト／藤井譲治　谷口徹　中村智孝
コーディネーター／木戸雅寿

第二部　江戸城・金沢城とその城下町
一　発掘された江戸城と城下町　古泉弘　130
二　よみがえる金沢城と城下町　滝川重徳　174

執筆者紹介

一　天下統一と彦根・膳所築城

京都大学教授　藤井譲治

ただいま紹介いただきました京都大学の藤井と申します。よろしくお願いします。

本日は、「天下統一と彦根・膳所築城」というテーマでお話をさせていただきます。話の進め方は、まず、少し前提になることを話させていただき、つぎに膳所城、そのつぎに彦根城を取り上げ、最後に膳所城と彦根城の築城がこの時期に持っている意味、あるいは位置について考えてみたいと思っています。

昨年度のシンポジウムは「信長の城、秀吉の城」というテーマで開催されたと聞いております。今年度のシンポジウムのテーマは「城と城下町」ということでありますが、私自身、本日は、先ほど申しましたように、「天下統一と彦根・膳所築城」ということで話をさせていただきます。

「天下統一」と申しますと、織田信長・豊臣秀吉そして徳川家康という三人の天下人を思い浮か

べられることと思いますが、今日の話は、家康が天下を掌握した慶長五年、一六〇〇年の関ヶ原の戦い後のことについて話させていただこうと思っています。

近江は大国

まず、それぞれの城について話をする前に、織田あるいは豊臣の時代から江戸時代の初めの近江が持った位置と特徴について、最も主要と思われる点、二点を申し上げておこうと思います。

第一点は、近世の近江は、よくご承知の方もあろうかと思いますが、みなさんが思っておられる以上に大国であったということです。

近江一国の石高は、十六世紀末、豊臣秀吉が死去する直前には、七七万五三七九石でした。当時の日本全国の高が、おおよそ一八〇〇万石でありますから、近江の七七万五〇〇〇石は全国の四・三パーセントを占めるに過ぎません。しかし、日本六六か国の一国平均石高は単純に割れば二七万石であり、それと比較すれば近江の国高は三倍近くになります。また順位からすれば、一位は陸奥国で、一六七万二八〇六石と圧倒的に大きな高ですが、現在の県で申しますと、岩手・宮城・福島の三県と青森県の東半分からなる広大な地域であり、特殊な性格を持っています。この陸奥に続くのがなんと近江です。三番目は六六万七一二六石の武蔵、京都のある山城国は二二万五二六二石に過ぎません。こうしてみると、近江国がいかに大きく、生産力的に重要な国であったか、その一端が分かっていただけたかと思います。

二　彦根城と城下町の調査

彦根市教育委員会　谷口　徹

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました彦根市教育委員会の谷口と申します。よろしくお願いいたします。

最初のほうでもお話がありましたけれども、彦根はちょうど築城四〇〇年祭を開催中です。先ほどの藤井先生のお話で、いつから四〇〇年だろうと疑問に思われたのではないかと思いますが、今年が二〇〇七年ですので、そこから四〇〇年前と言いますと、一六〇七年ということになります。築城工事は始まっていたんじゃないかと思われた方も多いかと思いますが、今回の彦根城築城四〇〇年祭というのは、天守が完成したであろう年から四〇〇年ということであります。おかげさまで、たくさんのみなさま方にお越しいただいておりまして、特にマスコットキャラクターの「ひこにゃん」が大人気で、みなさんを彦根に引っ張ってきてくれているように思っています。

彦根藩三〇万石（三五万石）

さて、今日はあまり時間がありませんので、全体を細かくご説明しているわけにはまいりません。参考資料の「佐和山城から彦根城へ」は読物風にしておりますので、後でお読みいただければと思います。

見出しに彦根藩三〇万石（三五万石）と書いておりますが、みなさんは、三〇万石・三五万石のどちらがほんとうだろうと思われていることでしょう。彦根では「三五万石」というお菓子も出ておりますけれども、与えられた領地は三〇万石です。図1をご覧いただきますと、彦根城の内堀から内側の第一郭の絵図がございますが、それの真ん中のやや左に「米蔵」と書いてあります。実はここに幕府から預かった米、それを領地に換算しますと五万石相当になりますが、その米を米蔵に備蓄しておりました。幕府からの預かり米ですね。預かり米ではございますが、飢饉など天下の大事がない場合には、基本的には彦根藩がいただいておりました。それを加えると三五万石ということで、所領としてはあくまで三〇万石でした。

築城に関係するところは、先ほど藤井先生がずいぶん詳しくご説明いただきましたので簡単に済ませたいと思いますが、私のレジメに築城の開始を慶長九年七月一日と書いておりますが、その点は先生と矛盾はないと思います。

それから、彦根城の築城の期間ですが、慶長九年（一六〇四）から始まりまして元和八年（一

三　膳所城下町を掘る

財団法人滋賀県文化財保護協会　中村智孝

こんにちは。滋賀県文化財保護協会の中村と申します。私からは、平成十四年におこないました滋賀県立膳所高等学校の校舎等改築工事に伴う発掘調査の成果についてお話をしていきたいと思います。

話の内容としては、最初に膳所城について残されている絵図などを用いてお話して、そのあとに発掘調査の成果を図面や写真を用いて説明させていただきたいと思っています。

膳所城と城下町の概要

まず、膳所城と城下町の概要についてです。「伊勢参宮名所圖會」（図1）にも描かれているように、膳所城は琵琶湖に張り出す水城として築かれたお城です。先ほど藤井先生のお話にもあったように、一六〇一年に大津城を廃し、関ヶ原の合戦後いち早くこの城が築かれています。

築城にあたっては、いくつか候補地があったわけですが、商業地として栄え交通の要所である大津に隣接することなどの理由から膳所の地が選ばれています。最初の藩主は大津城にいた戸田一西で、その後、二〇代、十九名の藩主が生まれています。藩主は、いずれも三河国の出身で、譜代の家臣である戸田家、本多家、菅沼家、石川家の人たちがなっていますが、京都の近郊という地域的な重要性から、徳川家から厚い信頼を受けた人たちが選ばれていたといえます。そのなかでも最も多いのが本多家で、三代、四代、八代以降、廃藩までの一三代にわたって藩主となっています。残される膳所城の瓦には、本多家の家紋である立葵紋の付く瓦（口絵Ⅲ）が見られます。

一方、城下町については、城の西側で、茶臼山などの山並みとのあいだに、東海道を軸として南北に長く形成されました。

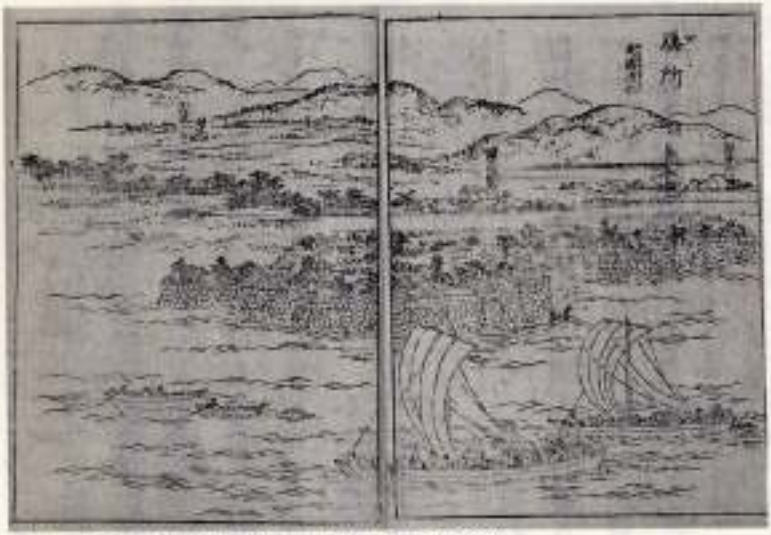

図1　伊勢参宮名所圖會（滋賀県立図書館蔵）

一　発掘された江戸城と城下町

東京都教育委員会　古泉　弘

ご紹介いただきました古泉と申します。よろしくお願いします。

実は一昨年、秋田に同じような話をしに行ったことがあるのですけれども、前日に来いといわれていまして、前日に出かけたのですけれども、その時は記録的な大雪になりました。東京から盛岡経由で秋田まで行っている新幹線が、盛岡で止まってしまいまして、それでどうしようかなと思ったのですけれども、そうしたら何とか代行バスが出まして、雪の中を四時間かけてたどり着きました。

そういうことがたまに私のまわりには起こるようで、今回も台風が来てだいぶみなさんにご心配をかけたそうで申しわけなかったのですが、私、今回も昨日のうちにこちらの近くまで来ておりましたので、無事に到着いたしました。

今日お話をすることですけれども、初めに二点ほどお断りをしておかなければなりません。一

つは、今ご紹介いただいたとおり、テーマが「江戸城と城下町」となっておりますが、ご案内のように江戸城というのは、中心部の大部分が宮内庁の所管になっていて、一部は皇居になっております。

それから、残りの部分については環境省の所管になっておりまして、何か土をいじるというような事業がないわけではなく、そうしたときに小さな発掘調査なども何度かおこなわれています。しかし、そういう事情もありまして、なかなか報告書を目にすることも少ないのです。

したがって、江戸城については、考古学の側からお話できることは、現時点では非常に限られております。ですから、今日のお話は、むしろ城下町の方が主体になるというふうにご理解をいただきたいと思います。

ただ、江戸城の範囲がどこまでかというと、いろいろな考え方がございます。現在皇居や東御苑になっている中心部分はもちろん江戸城ですけれども、城下町を含んだ、いわゆる惣構も城の一部であるという考え方もありますので、本日はトータルな江戸城、または江戸の市街ということでお話をさせていただきたいと思います。

それから、もう一点ですけれども、私は「埋蔵文化財」を担当しておりまして、特に江戸時代の発掘調査にかかわっております。江戸に関係する著書も出しておりますが、本来、近世史とか江戸の歴史とかについては専門ではないのです。やはり考古学の方が専門でありまして、そちらからみていくというのが本業なわけです。

二　よみがえる金沢城と城下町

石川県金沢城調査研究所　滝川重徳

ただいまご紹介にあずかりました、石川県金沢城調査研究所の滝川です。いまほどご紹介いただいたように、ここしばらくは、ずっと金沢城の発掘調査に携わっています。

金沢城調査研究所は、発掘調査以外にも文献資料を使ったり、あるいは数は少ないのですが、残っている建造物からアプローチしたりということで、さまざまな方向から金沢城の調査研究を進めています。

私は埋蔵文化財の調査をおこなっていまして、金沢城が築城初期の様相がどうなのかを解明することをテーマとして現在調査研究を進めさせていただいているところです。

本日はその成果の一部をご紹介したいと思っています。一方城下町については、私どもの組織は発掘調査に携わっておりませんが、金沢市や石川県埋蔵文化財センターなどが調査をおこなっ

ております。

特に金沢市のほうは近年、緊急調査だけではなくて、金沢城下町の成り立ちを調べるなど、学術的な調査も進めているということです。城下町のほうも、さまざまなテーマを設定できますが、今回は金沢城の話題と歩調を合わせるようなかたちで、その成立をめぐるような所見をお話させていただくとともに、代表的な調査地点につきまして、江戸時代を通じてどう変容していくのか、そういうことを留意しながら紹介したいと思っております。

金沢のまちの概略

それでは早速お話したいと思います。まずは金沢というところがどんなところかを簡単にご説明したいと思います。

金沢というまちは、日本海側のほぼ中央、石川県にあります。図1の地形図左上の黒い部分が日本海です。この日本海の海岸沿いを加賀地方といい、幅約一〇キロの平野部が展開しています。

金沢市街というのは、平野部と山地部の境辺りに位置するわけです。南東のほう、ずっと下がっていきますと白山があります。この南東の方角の山地帯から浅野川と犀川と

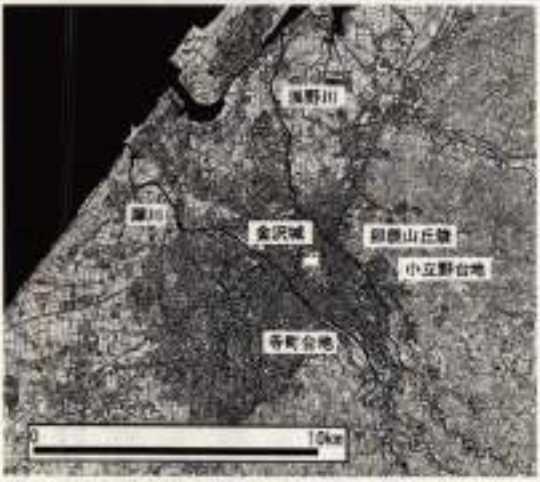

図1　金沢の地形